

『ピューティア祝勝歌』第8における ヘーシュキアー、ディカー、ハルモニ アーについて

桜内理恵

序

ピンダロス（前518-438）は、古代ギリシャのポイオーティアーのテーバイ出身の叙情詩人である。ここで取り上げる『ピューティア祝勝歌』第8は、現存している彼の最後の作品である。100行からなるこの作品は、前446年のアポローンを祭ったピューティア祭でレスリングで優勝したアイギーナ島出身のクセナルケスの息子、アリストメネースを祝うために歌われたものである。この時、ピンダロスは72才であった。この祝勝歌が歌われた12年前、アイギーナは、他の同盟国と共にアテーナイと戦って敗れ、以来アイギーナは、アテーナイに支配されていた。

『ピューティア祝勝歌』第8は、様々な点で人々の注目を集めている作品である。この作品では、冒頭で女神ヘーシュキアー（*Ἡούχια*）が讃えられている。「平和」「平穏」を意味するヘーシュキアーは、ピンダロスによって初めて擬人化された女神である。彼女は、女神ディカー（*Δίκη*）〔ディーケー（*Δίκη*）のドーリス方言、擬人化された「正義」〕の娘であると述べられている。アポローンに捧げられたピューティア競技会の祝勝歌において、冒頭で讃えられているのはアポローンではなく、この女神なのである。女神ヘーシュキアーとその母なる女神ディカーは、この作品に重要な意味を持つと考えられる。ギルダースリーヴが女神ヘーシュキアーは反乱を起こす人々を押さえ付ける自国の平和を意味していると解釈して以来、女神ヘーシュキアーが何を意味するのかについて様々な研究がなされてきた¹⁾。

又39行-56行にかけては、エビゴノイによるテーバイ遠征の物語が述べられている。これは、勝者アリストメネースとアルクマイオーンの類似を示すためここで述べられているというのが、多くの研究者の一致する見解であるが、パウラのようにアイギーナ島の将来を暗示しているものであるという見解を示す研究者もいる²⁾。

さらに、67行-72行に見られるピンダロスのアポローンへの祈りの言葉は、非常に不明瞭であり、多くの研究者を悩ませてきた。とりわけここでいわれるハルモニアー（*Ἄρμουα*）とはいったい何を意味するのかという問題は、度々論じられ、様々な見解が示されている。1800年代の初め、この箇所におけるハルモニアーは、音楽のテクニックの言葉、すなわち歌の代喩と考えられてきた。その後ギルダースリーヴは、これを詩人

『ピューティア祝勝歌』第8におけるヘーシュキアー、ディカー、ハルモニアーについて

がアポロンと融合した状態であると解釈した³⁾。パートン⁴⁾以後、ハルモニアーをメロディーと解釈する学者が多かったが、近年様々な解釈が出されている⁵⁾。

本論文は、この作品にはピンドロスの一貫した思想が全体に流れていると考える立場から、ヘーシュキアー、ディカー、ハルモニアーの問題を考察しようとするものである。

1 ヘーシュキアー、ディカーとは何か

「ピューティア祝勝歌」第8は、次のような言葉で始まる。

心優しき女神ヘーシュキアー、ディカーの娘、
力強き町の源よ。
知恵と戦いの要の鍵を握るあなた、
ピューティアの勝者の誉れをアリストメネースのために受け取り給え。
あなたは、時宜にあって
優しさを受け取る術と与える術を知っている。

しかし、誰かが、冷酷な憎しみを心に刻み込む折には、
あなたは、敵の力に無情にも向き合い、
ヒュプリスを深海に沈めるのだ。(1-12)

ピンドロスは、冒頭で女神ヘーシュキアーを讃え、彼女に「ピューティアの勝者アリストメネースの誉れを受け取る」ようにと祈っている。勝者の誉れを受け取るように歌われる女神ヘーシュキアーとは、いかなる女神なのであろうか。

女神ヘーシュキアーは、「力強き町の源」であり「知恵と戦いの鍵を握る」と言われ、まず町の、すなわち市民社会の平和と戦いに関わる女神として現われる。ピンドロスは、この作品以前にもこのような意味でのヘーシュキアーに幾度が言及している。例えば、『ピューティア祝勝歌』第1において、彼は、ゼウスが、勝者であるアイトナのヒーローンと息子に命じて、「民衆を協和したヘーシュキアーへと導いてくれるよう」に祈っている⁶⁾。この作品は、アイトナとエトルリア人との戦争の4年後に書かれたもので、再び戦いが起こらないことを望んで述べられたものである。又、断片では「誇り高き女神ヘーシュキアーの輝く光なる晴天へと市民社会を導くように」とも歌われている⁷⁾。これらの記述においても、ヘーシュキアーは、主として人間社会における戦いに対する「平和」「平穩」を表していると思われる。

ピンドロスは、ヘーシュキアーを何もせずに手に入るものだと考えていなかった。「敵の力に無情にも向き合い、ヒュプリス(ἕβρις)〔「傲慢」「尊大」の意〕を海に沈める」と述べられるヘーシュキアーは、敵と向き合いそれを倒す力強い女神である。又、上記の断片に見られる「誇り高き女神ヘーシュキアーの輝く光」は、「心からの怒りをぶつけるべき敵を取り去る」ことによって見い出されると述べられる。さらに『パイア

ーン』第2においては「味方を助けるために敵に立ち向い、時宜に叶ってやり遂げたときには、このような労苦はヘーシュキアーをもたらす」と言われる⁸⁾。これらの記述は、ヘーシュキアーが敵と戦い勝ち取られるものであることを示していると考えられる。

国家の戦いで勝ち取られる社会的な意味でのヘーシュキアーは、又個人の生活の状態をも意味するものとなる。『ビューティア祝勝歌』第4における勝者アルケシラースは、追放の憂き目にあっており、ピンダロスは、この讃歌の中でアルケシラースの帰国を彼の祖国の支配者に願っている。ピンダロスは、アルケシラースが「誰にもいかなる災難も与えず、彼自身どんな災難も受けずに」ヘーシュキアーを得たいと願っているのだと語る⁹⁾。「他人に災難を与えないこと」は、奢り高ぶらないこと、ヒュプリスに陥らないことを表していると考えられる。さらに「災難を受けない」ためには、受けた災難を跳ね返すだけの力を持っていなければならない。すなわち、他の力と戦い勝利し得る力を持っていないとてならないのである。このような者がヘーシュキアーを得ることができるのである。又、個人的な意味でのヘーシュキアーとは、客人に良いもてなしをし誠の心で町を愛して暮らすことであり、このような暮らしをする者は、女神ヘーシュキアーに献身する者であると述べられる¹⁰⁾。さらに、ヘーシュキアーに暮らすものは、ヒュプリスを避けることができるのだと言われている¹¹⁾。

ではなぜ、ピンダロスは、女神ディカーをヘーシュキアーの母としたのであろうか。女神ディカーとはどのような性質のものなのであろうか。『オリュムピア祝勝歌』第7において、勝者の父ダーマーゲートスは「女神ディカーに気に入られている」と言われている¹²⁾。そしてこの祝勝歌の終わりで、勝者ディアゴラスは、「ヒュプリスを憎む道を真つすぐに進んできた。彼は、高貴な祖先から伝わる正しい心が彼に教えてきたものを確かに学び取ったのだ。」と述べられる¹³⁾。勝者が学び取った祖先から伝わるヒュプリスを憎む正しい心は、当然、その父からも伝えられたものと考えられる。従って「女神ディカーに気に入られている」と言われる勝者の父も又「ヒュプリスを憎む人」であり、又このような心を受け継いだ息子もディカーに気に入られているのだと思われる。

又女神ディカーは、ヘーシオドス以来の伝統に沿って、テミス（掟）の娘でありエウノミア（秩序）とエイレーネー（平和）の姉妹であると歌われている。ここでは、女神ディカーは、「町の揺るぎない礎」として住んでおり、彼女と姉妹は「ヒュプリスを近付けない」のだと述べられる¹⁴⁾。

ピンダロスは、ペーガソスに乗って天に昇ろうとしたペレロポンテースを「正義に反した」者と語っている¹⁵⁾。正義は、人間社会の安定のためにのみ存在するのではなく、人間と神々との間の関係にも存在する。人間の分を越え神々の世界に足を踏み入れようとする者は、正義に反したものである。神々の領分を冒すということはヒュプリス故の行為と考えられる。ペガソスはペレロポンテースを振り落とした。そして「正義に反した幸せには、もっとも辛い最後が待ち受けている」と述べられる。又『オリュムピア

祝勝歌』第1では、人間の友を不死にしようとする神々からネクタルとアムブロンナーを盗みだしたタンタロスは、「驕慢のために」「救いのない辛い日々を送ることとなった。」16)のである。ペレロポンテースやタンタロスの例が示すように、神々はヒュプリスに陥ったものを決して許さず、彼らを破滅させる17)。

このように、正義に反しヒュプリスに陥り破滅させられた者は、ヘーシュキアーとは程遠いものとなる。ヘーシュキアーは、まず正義に叶った行為の上に得られるものと考えられる。それ故、ヘーシュキアーはディカーの娘と呼ばれ、「ヒュプリスを深海に沈める」というヒュプリスと相反するものとなるのであろう。又ピンダロスは、ヘーシュキアーとは客人に良いもてなしをし、誠の心で町を愛する暮らしてであると述べたが、これは又正義に叶った人間の生活としても述べられているものである18)。

ヘーシュキアーであるには、まず正義に叶ってヒュプリスに陥ってはならない。そしてヘーシュキアーは勝ち取るものである。言うまでもなく、このようにして得たヘーシュキアーは、人間にとって、非常に幸福なものであろう。ピンダロスは、この女神ヘーシュキアーに、ピューティア祭の勝者アリストメネースの誉れを受け取るようにと祈っているのである。アリストメネースは、ヘーシュキアーを得るに相応しい人間であるからだ。

2 ヘーシュキアー——アリストメネースとアイギーナ島の場合

『ピューティア祝勝歌』第8の冒頭で、ディカーの娘ヘーシュキアーは、町を強力にする女神であり、ヒュプリスを海に沈めると歌われた。これに続いて12-18行ではヒュプリスの例として、ギガースの王、ボルピュリオンと百の竜を持つテューポーンが挙げられている。テューポーンは、ヘーシオドスによって宇宙の秩序を乱す怪物と歌われた「神々の敵」である19)。テューポーンはゼウスの雷電により、ボルピュリオンはアポロンの弓により滅ぼされた。

ヒュプリスの象徴であるボルピュリオンを倒したアポロンは、今、ピューティア競技会で勝利したアリストメネースを迎える(19-20)。冒頭において、ピンダロスは、女神ヘーシュキアーにアリストメネースの誉れを受け取るようにと願った。そして今、ヒュプリスを倒したアポロンは、「恵み溢れる心(εὐμενεί νόω)」でアリストメネースを迎え入れると歌われる。冒頭で述べられた女神ヘーシュキアーは、ここでこの競技会を見守るアポロンの姿と重なり合うと思われる。すなわち、アポロンは、ヘーシュキアーをもたらしことができると考えられるのである。勝ち取るものであるヘーシュキアーは又、競技会で戦い、苦勞の末、勝利を手にした勝者が手にし得るものである。アリストメネースは、ヘーシュキアーを得たと考えられる。

続いて、アリストメネースの故郷、アイギーナ島が讃えられる(21-8)。ピンダロスは、アイギーナ島を「正義の町(δικαιοπόλις)」であると言う。先に述べたように、この時アイギーナは、アテーナイに支配されていた。テーパーイもアテーナイに苦しめられていたため、テーパーイ出身のピンダロスは、アイギーナに同情的であったと言われる。

又彼は、アイギーナに非常に親しみを持っていた。『イストミア祝勝歌』第8においては、アイギーナとテーバイは姉妹であるという神話が語られ、それ故テーバイの人はアイギーナを讃えるべきであると述べられている²⁰⁾。

「正義の町」アイギーナ島は、ヒュプリスとは無縁な町と考えられる。アイギーナは、当然、町を強力にする女神ヘーシュキアーに愛でられることを望むと思われる。しかし、この時戦いに負けアテーナイに支配されていたアイギーナは、ヘーシュキアーを得ているとは言えない。アイギーナは、正義に叶った町でありながら、ヘーシュキアーを得ることが出来ないのである。ここで正義に叶った町が必ずしもヘーシュキアーであるとは限らないと我々は知るのである。

3 ヘーシュキアー——エピゴノイの物語の場合

続いて、アリストメネースが、オリュムピアイストミアのレスリング競技で優勝した伯父たちの後を継ぎ、一族の名を汚すことなく同じ道を歩み勝利したことが讃えられる(35-8)。そしてその後、エピゴノイの伝説が始まる(39-56)。なぜピンダロスは、ここでアイギーナに関わる神話を選ばず、この有名なテーバイ遠征の物語を選んだのであろうか。他のアイギーナ出身の勝者を讃える祝勝歌では、皆アイギーナの神話が使われている²¹⁾。ピンダロスがテーバイ出身でありアイギーナに親しい感情を持っていたということのみで片付けられるとは思えない。ピンダロスがこの物語を使って述べようとしたテーマとは、いかなるものなのであろうか。

エピゴノイの物語は次のようなものである。アドラストスを総帥としてテーバイに攻め入ろうと向かった7将は、将の1人で予言者である英雄のアムピラーオスが予知したとおり敗れ、アドラストスのみが生き残り、死んだ者たちの死体を集め埋葬した。この遠征には神々の賛同が得られず、むしろゼウスはこれをやめるよう彼を促していたのである²²⁾。10年後、アドラストスは、アムピラーオスの息子で父と同じ予言者アルクマイオンを含む戦死した者たちの息子たちを集め、再びテーバイに向かう。この2度目のテーバイ攻めの参加者たちをエピゴノイといい、彼らはこの戦いに勝利する。しかしこの時、アドラストスの息子は戦死した。

ピンダロスは、テーバイに到着したエピゴノイの姿をこの世以外のところから見たアムピラーオスの予言として、これを述べている。

「父から子へと伝えられた気高き精神が輝いている。

私には、アルクマイオンがはっきりと見える。

最前列で青銅の楯の斑の蛇を振るう彼が。」(44-47)

この戦いで、アルクマイオンが「最前列で青銅の楯」を振って戦い、エピゴノイの指揮を取ったということは、ピンダロスがここで初めて語ったことである。アポロドーロスが語るところによると、アルクマイオンが指揮を取ればエピゴノイが勝利すると

いうアポロンの神託があったため、彼が指揮を取ることになったという²³⁾。

武勇と予言で誉れ高きアンピアラオースの後を継ぎ、アポロンの予言に従い最前列で戦った同じく予言の術に長けたアルクマイオーンの姿は、かつて競技会で優勝した伯父たちの後を継ぎ、アポロンを祭る競技会で勝利を得たアリストメネースの姿と重なるものである。彼らは、共に祖先より受け継いだ武勇を如何なく発揮し、アポロンに勝利を与えられたのである。アルクマイオーンもアリストメネースと同様にヘーシュキアーを得ていると考えられる。ピンダロスが「私も又、心からアルクマイオーンに花冠を捧げ、誉め歌を降り注ぐ」(56-7)と歌い、アルクマイオーンを「私にとっても隣人であり、富の守護者である」⁶⁸⁾と述べるのは、この類似故であると思われる。勝者アリストメネースと比べられるアルクマイオーンは、ピンダロスにとっても又隣人であり、彼の富の守護者なのであろう。

多くの学者が指摘²⁴⁾しているように、確かにピューティア祭の勝者アリストメネースは、エピゴノイのアルクマイオーンと類似しており²⁵⁾、ピンダロスがこの物語を選んだ理由の1つはこのためと考えられる。しかし、彼がこの物語で述べたかったことは、このことだけであろうか。アムピアラオースは、続けて予言している。

「英雄アドラストスは、以前災難を受けたが
今は、鳥占いの吉兆に包まれている。
しかし、彼自身の家族には、その逆となろう。
なぜなら、彼は、ダナオス軍の中でただ1人、
死んだ息子の骨を集め、
神々の良き定めにより負傷せぬ者たちと共に
広きアバースの通りに戻るであろうから」(48-55)

初めのテーバイ攻めと異なり、「鳥占いの吉兆に包まれ」と言われるエピゴノイの勝利は、神々の定めである。それ故、エピゴノイの殆どの者は故郷に、「広きアバースの通り」に戻ることが出来たのである。神々に勝利を認められたエピゴノイが正義^{ディカー}の反していたということは考えられない。しかし総帥アドラストスだけは、敵との一騎討ちで「死んだ息子の骨を集め」ねばならなかった。身内の敗北は損失であり、損失は勝利とは言えない。従ってエピゴノイは勝利したとしても、アドラストス個人は真に勝利できず、ヘーシュキアーを得ることはできなかったと考えられる。

先に述べられたアイギーナは、「正義の町」^{ディカネポリス}でありながら、戦いに勝利することができず、ヘーシュキアーを得ることができなかった。そして、アドラストスも又、エピゴノイが神に約束された勝利を得た時にも、ヘーシュキアーを得ることができなかったのである。これらの例は、正義^{ディカー}に反せず勇敢に戦っても、必ずしもヘーシュキアーがやってくるとは限らないことを示していると思われる。我々は、このエピゴノイの物語に、2つの類似を見ることができよう。1つは、家系に恥じない武勇を見せ、アポロ

ーンに勝利を与えられヘーシュキアーを得たアルクマイオンとアリストメネースの類似であり、もう1つは、ヒュプリスに陥らなくとも、勝敗に戦っても、祖国にそして家族に勝利をもたらすことができず、従ってヘーシュキアーを得ることができないアドラストスとアリストメネースの祖国アイギーナの類似である。

4 ハルモニアーとヘーシュキアーについて

そして、アポローンへの祈りへと続く。まずアポローンがこの競技会でアリストメネースに「最大の喜びを授けた」(64)ことが歌われる。アポローンは、以前にもアイギーナ島のアポローンと妹アルテミスを祭る競技会で彼に勝利を与えたことがあった(65-66)。そして、ピンダロスは祈る。

王(アポローン)よ、私は祈る。
私が歩み行くそれぞれの事について、
ハルモニアーを快く見守られますように。

女神ディカーは、良き歌声の合唱隊に伴っている。
けれど、私は祈る。クセナルケスよ。
君の家の幸運を神々が羨むことのないようにと。(67-72) 26)

ピンダロスが「歩み行くそれぞれの事について」^{ヘコンジテイ}「快く(ἐκόντε νόω)」^オ〔「快い心で」の意〕見守ってくれるようアポローンに祈っているハルモニアーとは、何を意味するのであろうか²⁷⁾。「歩み行くそれぞれの事」とは2つの意味を含蓄していると思われる。1つは、冒頭から歌われてきたこの祝勝歌のこれから完成までの内容であり、もう1つは、ピンダロス自身と勝者アリストメネースが歩いていく将来に起こる事柄である。彼は、2つの意味でのそれぞれ事柄について、アポローンにハルモニアーを快く見守ってくれるよう祈っているのである。

これに続けて彼は、「女神ディカーは、良き歌声の合唱隊に伴っている」²⁸⁾という。「良き歌声の合唱隊」とは、今この祝勝歌を歌っている合唱隊であり、祝勝歌はアリストメネースの幸福の絶頂を意味する。彼は、戦い勝利することによってこの祝勝歌を得たのである。パトロンである彼の勝利の歌を創るピンダロスにとっても、祝勝歌が歌われることは又良き瞬間であることに間違いない。彼を讃え歌う「良き歌声の合唱隊」は、アリストメネースの、そしてピンダロスの良き瞬間の象徴である。ピンダロスは、この良き瞬間に女神ディカーが伴っていると述べているのである。ディカーに伴われ勝利を得た今、アリストメネースはヘーシュキアーを得ている。そして又、ピンダロスもヘーシュキアーを獲得していると思われる。

しかしさらに、ピンダロスは、この先勝者の家の「幸福を神々が羨むことのないように」と祈る。人間よりも遥かに幸福であるはずの神々が羨むほどの幸福とは、人間にと

っては分を越えたものである。人間が分を越えて神々に近付くということは、ヒュプリスに陥ることと同様であると考えねばならず、それは正義に反したことである。今は、彼らには女神ディカーが伴っており、彼らの幸運を神々が見守っている。ピンダロスは、勝者も自分もヒュプリスに陥ることなく、すなわち「神々が羨むことなく」、いつまでもこのような良い状況が、ヘーシュキアーが続くようにと願っているのだと考えられる。

この記述を踏まえて、ハルモニアーについて戻って考えてみたい。彼の言う「歩み行くそれぞれの事」が現在歌われている祝勝歌であるとするならば、ピンダロスがあまりに勝者を誉めすぎれば、それは勝者をあまりにも幸福にし、神々が勝者を羨むような状況を作り出すことになる。このことは、勝者もピンダロスもヒュプリスに陥るということの意味する。しかし、あまりにも称賛が不足していれば、苦勞して戦い勝利を得た勝者に相当な幸福を与えることができず、それは祝勝歌の意味を持たないのである。このことは又、ピンダロスと勝者の将来についての警告ともなる。この先もし勝利を重ね富を得ながらそれ以上のことを望むことがあれば、それは神々が羨むほどの幸福となりヒュプリスを意味するものとなる²⁹⁾。しかし彼らがいくら苦勞を重ねても勝利できなければ、幸福とは程遠い惨めな状況になる。

それ故、ピンダロスは、ハルモニアーを見守ってくれるように祈っているのではないだろうか。ここで言うハルモニアーとは、勝者であり続けることができ、しかも奢り高ぶりヒュプリスに陥ることのない、釣り合いのとれた程よい状態である。苦勞を克服できる力のある状態、そして又正義に伴われヒュプリスを克服できる状態である。これは、ロスの言うような中庸の状態であろう³⁰⁾。そしてそれは、まさにヘーシュキアーなのである。

先にアポローンは、女神ヘーシュキアーと同様にヒュプリスを倒し、勝者を「恵み溢れる心」で迎え入れた。今ピンダロスは、アポローンに自分たちが「歩み行くそれぞれの事柄について」このような釣り合いの取れたよい状態であるハルモニアー「快く」、すなわち勝者にヘーシュキアーを与えた同じ「心で」見守ってくれるように祈っているのである。

5 ヘーシュキアーをもたらしもの

続けてピンダロスは、勝利を授けるものについて述べている。

勝利は、人間どもの力によらず、神が授けるものである。
時には人を高みに上げ、時には人を手の下に落とすのだ。
適度に引き上げて。(76-78)

ここで「勝利は、人間どもの力によらず、神々が授けるものである」と言われる。勝利は、神々の意志によるものである。エピゴノイの勝利もアリストメネースの勝利もアポローンの授けたものである。勝利は、神々の授けるものであり、神々は「ある時には

人を高みに上げ、ある時には人を手の下に落とすのである」から、たとえ正義^{ダイカ}に叶ったものが勝利を得たとしても、それが永遠に続くとは限らないと思われる。従って、勝ち取ることによって生じるヘーシュキアーも又、人間に永遠に与えられるものとは考えられない。

では、神々にヘーシュキアーが永遠に与えられる者とは、どのような者であろうか。『ネメア祝勝歌』第1においては、ヘーシュキアーを永遠に与えられた者の例が述べられている。予言者テイレンアースは、ヘーラクレスが、昇天した後、永遠にヘーシュキアーを得るであろうと語る。ヘーラクレスは、地上でギガースすなわち「正義を知らない(*ἀειποδίκας*)」怪物どもを破滅させた後、偉大な労働の報いとして天上に住まうこととなり、神々から永遠のヘーシュキアーを与えられるのである³¹⁾。このようにヘーシュキアーは神々が与えるものであり、ヘーラクレスは永遠のヘーシュキアーを得た。しかし、彼は天上で永遠なるヘーシュキアーを得たのであり、単なる人間が、地上でそれを約束されることはないと思われる。

『ビューティア祝勝歌』第8に戻ると、勝利は神々が授けるものであるということを示した後、ピンダロスは、アリストメネースの勝利を今一度讃え、次にアリストメネースに打ち負かされた4人の敗者の様子を述べている。

ビューティア祭では、彼らに幸せな帰還は定められていなかった。

君のような幸せな帰還は。

母の元に帰る際、

心地よい笑いが、あたりから喜びを沸き起こすこともなかった。

彼らは、敵を離れてもなお裏道をこっそりと歩くのだ。

不幸に痛み付けられて。(83-87)

「不幸に痛み付けられて」「敵を離れてもなお裏道をこっそりと歩く」という戦いに負けた彼らの様子は、非常に惨めなものである。勝利し得なかった彼らは、ヘーシュキアーで獲得できない。すなわち、ここではハルモニアを外れた状況が語られているのである。先にピンダロスは、自分たちがこのような状況に陥らぬよう神々に祈っていたのである。

そして、再びこれら敗者と相反する状況にある勝者アリストメネースを讃えた後、彼は人間のはかなさについて述べている。

人間の喜びはわずかなうちに育つ。

しかし、わずかなうちに又大地に倒れる。

逆らう運命に打ちめされて。

日々の生きものよ、人とは何。何が人でないというのか。

人間は影の夢。

けれど、ゼウスから太陽の光が贈り物としてやってくる時

輝く光と心地よい時が人間どもに授けられるのだ。(92-97)

先に勝利は「神々が授けるもの」であり、「ある時には人間を高みに上げ、時には手の下に落とす」と言われた。そして又、ここで「人間の喜びはわずかなうちに育」ち、「逆らう運命に打ちのめされて」「わずかなうちに又大地に倒れる」と言われる。人間とは「日々の生きもの」であり、「影の夢」である。従って、人間がヘーシュキアーを得たとしても、それは永遠のものではない。ゼウスから「輝く光と心地よい時」が贈られる時のみ、人間は幸福になれるのである。ここで言う「輝く光と心地よい時」とはヘーシュキアーを表していると思われる。人間は、はかないものであり、神々に贈られた時のみヘーシュキアーを得ることができるのである。そして、ピンダロスは続けている。

母なる愛しいアイギーナよ。

思いのままの航海でこの町を進ませよ。

ゼウスとアイアコスと共に、

そして又、ペーレウス、勇敢なテラモーンやアキレウスと共に。(98-100)

勝者の祖国アイギーナは、「正義の町」^{ダイオキオポリス}でありながら、ハルモニアーな状態を保つことも出来ず、ヘーシュキアーを得ることも出来ない。ここでピンダロスは、「思いのままの航海でこの町を進ませよ」とアイギーナの自由を願っている。すなわち、神々が、勝者と同様にこの国にもヘーシュキアーを授けることを願っているのである。そして、アイギーナに由来する人々の名を挙げ、この讃歌は終わっている^{注32}

結 論

考察してきたように、『ピューティア祝勝歌』第8には、競技会と戦争の類似の中で、ヘーシュキアー、ディカー、そしてハルモニアーが、全体のテーマとして貫かれている。冒頭で讃えられるヘーシュキアーは、人間にとって最高の幸福な状態である。女神ヘーシュキアーは、ディカーの娘であり、ヘーシュキアーであるためには、なによりもまず^{ダイカー}正義に叶った生活をしなければならない。^{ダイカー}正義に叶った生活とは、とりわけヒュブリスに陥らないことを意味する。しかし^{ダイカー}正義に叶っているだけではヘーシュキアーを得ることはできない。ヘーシュキアーは勝ち取られるものであり、苦勞を克服して勝利しなければ得ることができないのである。

エピゴノイの遠征の物語は、2つの類似を示している。1つは、アポロンによってヘーシュキアーを得たアルクマイオンと競技会の勝者アリストメネースの類似であり、もう1つは、正義に叶っていてもヘーシュキアーを得ることができない不運なアドラストスとアテーナイとの戦いに敗れたアイギーナ島の類似である。ピンダロスは、この物

語において人間が正義の道を進もうとも、必ずしもヘーシュキアーになれるとは限らないことも表したのである。

ピンダロスがアポローンに祈るハルモニアーとは、勝者であり続け且つヒュプリスに陥ることのない中庸の状態をいう。すなわちこれは、ヘーシュキアーを指すものである。

この祝勝歌を通して、ピンダロスは、人間がヘーシュキアーを得ること、そしてそれを持ち続けることの難しさを述べている。なぜなら、勝利は神々が与えるものであり、神々は、その時々人間を高みに上げたり引き降ろしたりする。すなわち人間のヘーシュキアーは、最終的には神の意のうちにある。ピンダロスは、ハルモニアーから外れヘーシュキアーを得ることが出来ない惨めな敗者の姿をも述べている。永遠にヘーシュキアーが得られるものは、ヘーラクレスのようなもの以外にはいないのである。「日々の生きもの」であり、「影の夢」であるはかない人間が手に入れたと思っても、それは束の間のことであるかもしれない。だからこそ、ピンダロスは、自分と勝者のハルモニアーを見守ってくれるよう、すなわちヘーシュキアーがいつまでも続くようアポローンに祈っているのである。

注

- 1) この箇所へのヘーシュキアーについての主な研究では、ヘーシュキアーは、反乱を起こす人々を押さえ付ける自国の平和を意味する (B. L. Gildersleeve, *Pindar The Olympian and Pythian Odes*, New York, 1885, pp327-328)、自国が他国の侵略すなわちヒュプリスに対抗する力を意味する (R. W. Burton, *Pindar's Pythian Odes*, Oxford, 1962, p176、E. L. Bundy, *Studia Pindarica*, Berkely, 1962, pp26-27)、成功した勝者の状態を表す (M. R. Lefkowitz, *Pindar's Pythian 8 CJ72* (1977) pp. 209-221)、選ばれた町の市民が得ることが出来る平和を意味する (F.J. Nisetich, *Pindar's Victory Songs*, Baltimore and London, 1980, p200) 勝者の平穏は、個人の正義の行いの結果であることを示している (K. Crotty, *Song and Action*, London, 1982, pp17-18)、アイギーナの卓越した状態を表している (G. Kirkwood, *Selections from Pindar*, n. p. Scholars press, 1982, pp208-209)、宇宙の無秩序に対する力であり、同時に政治的秩序そして競技会の秩序をも表している (D. S. Carne-Ross, *Pindar*, London, 1985, pp186-188) 等の見解がある。
- 2) B. L. Gildersleeve, *op. cit.* p330, F. L. Bundy, *op. cit.* p69, C. A. P. Ruck and W. H. Matheson, *Selected pindar Odes*, Michigan, 1968, pp101-102, G. Kirkwood, *op. cit.* pp201-202, K.Crotty, *op. cit.* pp18-24は、このエピソードの物語はアルクマイオンとアリストメネースの類似を示すものであると指摘している。その他 C. M. Bowra, *pindar*, Oxford, 1964, p299は、2度目の戦いで勝利するこの物語は、アイギーナの将来を暗示するものであると述べている。M. R. Lefkowitz, *art. cit.* pp213-216は、アルクマイオンとアリストメネースを重ね合わせ、勝利することの難しさを述べ、勝者の状況を敗者と比較して際立たせていると語っている。さらに、D. S. Carne-Ross, *op. cit.* pp178-179は、上記のこ

とに加えて、人生には勝つ時もあり負ける時もある。人生には浮き沈みがあるという
こと、さらに、勝利には、悲しみと損失が付き物であるということを表している
と指摘している。

- 3) B. L. Gildersleeve, *op. cit.* p331.
- 4) R. W. Burton, *op. cit.* pp184-186. ピンダロスは正しい言葉、詩歌を選び出すためにアポローンの助力を願っているのだと解釈している。
- 5) 最近の主な研究では、M. R. Lefkowitz, *art. cit.* p214 が、これは勝利に約束された讃歌であると解釈している。C. Kirkwood, *op. cit.* pp211-212は、ここでピンダロスが述べていることは、アポローンが象徴する節度と秩序を自分たちに与えてくれるということであると述べている。T. K. Hubbard, *art. cit.* pp286-292 は、ハルモニアーは詩の話題の移り変りの適切さを表しているとした。Hubbard に対して、W. J. Verdenius, *art. cit.* pp367-368は、詩人の創作に対する神の同意を表現しているのだと反論している。Ross, *op. cit.* pp180-181 は、ハルモニアーを適切さ、中庸と解釈し、ピンダロスが讃歌の誉めすぎもしない不足ない適当な釣り合いを与えてくれるように祈っているのだと解釈している。注25、26を参照せよ。
- 6) *Pyth.* 69-71.
- 7) *Fr.* 99b.
- 8) *Paeon* 2, 19-22.
- 9) *Pyth.* 4. 293-297.
- 10) *Ol.* 4. 17-20
- 11) *Pyth.* 11. 55-56.
- 12) *Ol.* 7. 17.
- 13) *Ol.* 7. 91-93.
- 14) *Ol.* 13. 1-10.
- 15) *Isth.* 7. 42-48.
- 16) *Ol.* 1. 54-62. 又、*Ol.* 13. 10においてヒュプリスは驕慢の母と言われる。
- 17) 他に *Pyth.* 3. 45-58のアスクレーピオス、*Pyth.* 4. 90-92のティテュオス、*Pyth.* 2. 28のイクシーオーンもこの例にあげられる。
- 18) *Ol.* 2. 5-7, *Nem.* 4, 11-13.
- 19) *Theog.* 820-868. cf. *Pyth.* 1. 13-21.
- 20) *Isth.* 8. 17-23.
- 21) 例えば、アイギーナの勝者を讃えている *Nem.* 3. の40-64では、アイギーナに由来する英雄アキレウスの物語が述べられおり、*Ol.* 8. 31-52では、アポローン、ポセイドーン、アイアコスがトロイアの壁を築いた神話が述べられている。
- 22) *Nem.* 9. 18-20.
- 23) *The Library*, 3. 7. 2
- 24) B. L. Gildersleeve *op. cit.* p331は、ピンダロスの住まいの近くにアルクマイオーンの社があったと推測している。
- 25) 注2を参照せよ。

- 26) ὤναξ, ἐκόντι δ' εὐχομαι νόφ
κατά τιν' ἄρμονίαν βλέπειν
ἀμφ' ἕκαστον, ὄσα νέομαι.

67-9行の読み方には、見つめているのが、アポロンであるという説 (C. A. P. Ruck and W. H. Matheson, *op. cit.* p102. M. R. Lefkowitz, *art. cit.* p214. F. J. Nisetich, *op. cit.* p204. W. J. Verdenius, Pindar, Pythian 8, 67-72, *Mnemosyne* 36(1983), pp367-368. D. S. Carne-Ross, *op. cit.* p180) とピンダロス自身であるという説 (B. L. Gildersleeve, *op. cit.* p331. R. W. Burton, *op. cit.* pp184-186. C. M. Bowra, *op. cit.* p400. G. Kirkwood, *op. cit.* p211. T. K. Hubbard, Pindaric Harmonia : Pythian 8, 68-69, *Mnemosyne* 36(1983), pp286-292.) と2通りある。

27) ハルモニアとは、元来、全く異なった物や現象を結び付けるものであった。音学の領域では、ハルモニアは、音の連続、すなわち、和音ではなく、ある音が適切に次の音に続いていくメロディーである。ピュータゴラスによって、ハルモニアは、音階を構成する比率や割合を表すようになり、この概念は宇宙を統合し反対のものを結合する原理へと広げられていった。そして、それはヘーラクレイトスやエンペドクレスに受け継がれていった。このような宇宙論的な秩序や釣り合いとしての抽象的な意味を持つハルモニアは、ピンダロスの同時代人のアイスキュロス(PV550)にも使われている。

28) 現存するピンダロスの作品では、4度ディカーの女神に言及されている。その内2度がこの作品に現われている。ディカーの女神はこの作品に重要な意味を持つものと考えられる。E. L. Bundy, *op. cit.* p61 n. 69は、71行目のディカーの女神は適切な創作の意であるとしている。T. K. Hubbard, *art. cit.* pp290-292は、不足もなく過度でもない賛美の適切さであると解釈し、W. J. Verdenius, *art. cit.* p368は、讃歌が勝者に与えられる正当性を意味しているとしている。D. S. Carne-Ross, *op. cit.* p181は、女神ディカーは、競技の秩序を支配し、同時に傲慢なものを覆すものであると解釈している。

29) *Nem.* 9.45-6には、死すべき者が、多くの富と名声を得ながら、それ以上のものに辿り着くのは不可能であると述べられている。

30) D. S. Carne-Ross, *op. cit.* pp180-181. 注4を参照せよ。

31) *Nem.* 1.60-72.

32) アイアコス、ニンフのアイギーナの息子であり、ギリシャの英雄の中で最も敬虔な人と言われる。ペーレウスとテラモーンは、アイアコスの息子であり、アキレウスは、ペーレウスの息子である。皆アイギーナに由来する人物である。

テキストは、C. M. Bowra, *Pindari Carmina*, Oxford, 1947を使用した。

1907
1908
1909

1910
1911
1912
1913
1914
1915
1916
1917
1918
1919
1920
1921
1922
1923
1924
1925
1926
1927
1928
1929
1930
1931
1932
1933
1934
1935
1936
1937
1938
1939
1940
1941
1942
1943
1944
1945
1946
1947
1948
1949
1950
1951
1952
1953
1954
1955
1956
1957
1958
1959
1960
1961
1962
1963
1964
1965
1966
1967
1968
1969
1970
1971
1972
1973
1974
1975
1976
1977
1978
1979
1980
1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1989
1990
1991
1992
1993
1994
1995
1996
1997
1998
1999
2000
2001
2002
2003
2004
2005
2006
2007
2008
2009
2010
2011
2012
2013
2014
2015
2016
2017
2018
2019
2020
2021
2022
2023
2024
2025
2026
2027
2028
2029
2030
2031
2032
2033
2034
2035
2036
2037
2038
2039
2040
2041
2042
2043
2044
2045
2046
2047
2048
2049
2050